者に讃辞を送りたい。個人情報保護の徹底が叫ばれる現在、恐らく同書の存在は、研究の世界に足を踏み入れたばかりで、資料調査に悪戦苦闘中の方々にとって何よりの心の支えとなる。本書を念頭に資料調査を行い、個人情報を含む資料の公開を臆せずお願いする努力が必要だろう。もちろん、われわれ先行する世代も。

（ミネルヴァ書房、2012年２月、350頁、6,000円）

小山みずえ 著
『近代日本幼稚園教育実践史の研究』

太田　素子（和光大学）

（1）本書の課題と構成

著者が指摘する通り、これまで日本の幼児教育史研究の主要な成果は、制度史や思想史の分野で現れており、保育実践に関する歴史研究は大変後れていた。著者が各地の幼稚園に保存されていた保育日誌や保育案、教材などの第一次史料と、雑誌に掲載された実践記録とを組み合わせて実証的水準の高い保育実践史研究を著したことは、この分野では画期的な仕事である。

本書は、保育者が「制度や思想との相互作用の中でいかなる保育実践を展開したのか、…保育実践形態の特質とそこにみられる保育実践の原理や方法を明らかにする」（８頁）ことを目的として、直接には以下の課題をあげている。

1、恩物中心の保育が改善される過程をその背後の保育観も含めて明らかにすること。
2、その過程で生み出された保育内容の特質、とくに個々の幼稚園独自の内容と教材を検討すること。
3、それらの実践を背景として昭和初期に生み出された保育形態の特質を検討すること、の３点である。

印象的だったのは、序章において著者が「近代日本の保育者たちは主体的に保育実践を展開し、それによって幼稚園教育の質的向上が図られてきた」（８頁）と述べている点である。従来ともすれば日本人には未知の移入物として、中央からの啓蒙的な指導に基づく実践を繰り広げたと見られがちな幼稚園の保育を「主体的」と指摘しえたのは、保育者の「主体」が自己表現する実践記録という史料に依拠した歴史研究だからであろう。保育者たちはどのような意味で主体的だったのかが興味深い。

本書の構成は、目次をあげて簡潔に紹介すると以下のようである。

序　章　本研究の課題と方法
第Ⅰ部　明治後期・大正期における幼児の心理への着目
　第１章　明治後期の幼稚園における恩物教育の改善
　第２章　明治後期の幼稚園における保育研究の展開―松本幼稚園における児童心理学の受容を中心に
　第３章　大正期の幼稚園における保育方法の改善―神戸幼稚園を事例として
第Ⅱ部　大正・昭和初期の幼稚園における保育内容改革
　第４章　幼稚園における「お話」の成立過程
　第５章　新しい遊戯法の導入と「遊戯」研究の展開―京阪神（関西）連合保育会の活動を中心に
　第６章　自然保育の導入と展開
第Ⅲ部　昭和初期における生活に根ざした保育実践形態の確立
　第７章　保育カリキュラムの編成と生活題材への着目―「主題」に注目して
　第８章　幼児の生活に根ざした保育実践の創造
結　章

（2）本書の内容

まず第１章では、愛珠幼稚園の史料で恩物の取捨選択が進んでいることを実証した。その際、当時の指導的思想の影響もありつつ、「幼児にあわない」「目に悪い」（32－33頁）など日常的な保育実践の反省的な吟味が取捨選択の判断に生きていたという。自由な取捨選択の様子や、恩物の混用、共同製作などの保育活動を日記の記述から引き出している。

第２章では、1887年開智学校の附属幼稚園として創設された松本幼稚園が、1900年代に入って児童心理学を受容し、幼児研究、玩具研究、童話研究を展

開した様子を明らかにしている。著者は松本幼稚園の保育研究が、①幼児研究では、松本孝次郎のフレーベル会における講義に学び、主として個性の研究に力を傾注したこと、②玩具研究は発達水準と玩具の関係が詳細に研究され、恩物、日本伝来の玩具、輸入玩具、新案玩具が混合され、発達という観点から再構成されたと指摘する。また、③童話研究では、明治中期までの徳育を直接的目的とする童話教育から、子どもの興味を重視し滑稽（ユーモア）や想像力に注目する展開を保育日誌の中から引き出している。

第３章では神戸幼稚園の実践を対象に、その保育研究を分析している。京阪神連合保育会やフレーベル会（日本幼稚園協会）の機関誌に寄せられた同園の実践報告を手がかりとして、同園が一人ひとりの個別の能力発達の科学的な研究を進めながら、発達を阻害する要因を見極め、個別指導による発達の促進をめざしたと指摘する。モンテッソーリの受容や戸外保育の研究的な取り組み、神戸市全体での「校園連絡会」つまり小学校との連絡の研究の必要が自覚されていたが、その際には幼稚園固有の教育を実践することが円滑な小学校への連絡の基礎を準備するという立場を取っていたという。著者は「小学校教育の先取りではない幼稚園教育独自の保育方法を追求した」と評価した上で、保育の科学化については「幼児の生活を総合的に捉える視点が不足」（83頁）していたとみなしている。

第４章は、明治初期の保育項目「談話」が、大正期に入って「お話」へと変化してゆく過程を、アメリカにおけるストーリーテリングの受容と展開として紹介する。ブライアントやシェッドロック、水田光『お話の研究』1916年、同『お話の実際』など幼児の内面的な欲求を満足させ想像力を刺激する芸術としての価値を重視、保母が自分のものとして話すことができるお話を選択すること、などが強調された。東京女子高等師範学校附属幼稚園のお話の実践と、その中から生み出された『幼児に聞かせるお話』（1920年）の出版では、反復や韻律の尊重、空想的な要素の尊重、生活性、勧善懲悪など教訓性の排除と緩和が進んだことを指摘。芸術家からの批判に対して芸術性による子ども離れの反批判を展開できたことにも注目している。

第５章では主に京阪神連合保育会雑誌に掲載された報告を手がかりとして明治後半から昭和初期までの遊戯教材の発展が検討されている。唱歌遊戯や律動遊戯など、子どもの身体や感情を開放する子ども文化の提唱者の提案に刺激を受けつつ、現場の保育者が子どもの生活の中に題材をとった教材の開発に積極的に従事したことが注目される。彼女たちは歌詞を子どもの活動の中から生みだし、師範学校や女学校、小学校の教師に作曲を依頼したり、時には作曲法を学んで自ら作曲する。唱歌遊戯や律動遊戯そのものは研究されてきたが、このような保姆会の作品交換会という仕組みを伴った実践の交流に注目する点は新鮮である。

第６章は、自然保育の実践を取り上げた。大正から昭和初期、都市化の進展の中で自然との共生を求める心理が強まり、とくに幼い子どもを自然の中で育てたいという希望が保育実践の中でも台頭してくる。この章では大阪下町の江戸堀幼稚園で善タケがとりくんだ「自然物おもちゃ」の実践と、成田山新勝寺の門前町に広大な敷地を持って開園した成田幼稚園の園庭園舎の設計に込められた自然との共生をめざす保育が取り上げられている。

第Ⅲ部は保育形態論の成立を扱っている。

1923年アメリカ視察から倉橋惣三が持ち帰った国際幼稚園連盟の「幼稚園カリキュラム」抄訳が日本に紹介された。保育項目を分科的に扱う傾向の強かった当時の日本の幼稚園教育にとって、主題中心のカリキュラムが紹介されたことの意義は大きく、各地の幼稚園は主題によって半構造化されたカリキュラムを持つようになってゆく。東京女子高等師範学校附属幼稚園の生活主題は、季節的な環境の変化や行事で、主題が自ずと保育の中心を作っていた。熊本幼稚園、松本幼稚園などでは環境調査や幼児の実態調査に基づく保育要目配当表が作成された（第７章）。

第８章では、東京女子高等師範学校附属幼稚園『系統的保育案の実際』（1935）が、倉橋の『保育法真諦』も参照しながら検討される。菊池ふじの他保育者の文章から、自由遊びを中心としながらその中に中心興味を育てるという保育方法は、すでに実践現場で保育者たちがおこなっていた保育実践だったとして、倉橋の思想はそれを「自己充実」と「生活の発展」という枠組みで捉え直す契機になったと指摘する。また、名古屋市立第一幼稚園、関西連合保

育会の専門家と連携した個性調査がとりあげられ、保育者は実践の反省的な吟味をカリキュラムに生かしていたと指摘している。

（3）若干の感想

以上のように、本書は各地の幼稚園に残されている実践関係資料、教材、保育雑誌の実践報告を、とりわけ京阪神連合保育会とフレーベル会とその影響下の幼稚園の中から中核的な幼稚園を事例として取り上げる。

開智学校の附属幼稚園として出発した松本幼稚園の幼児研究、神戸市立神戸幼稚園における児童研究の吸収とモンテッソーリ教育法の導入、談話からお話への展開を東京女子高等師範学校附属幼稚園と大阪市立幼稚園の事例で検討、遊技改革や自然保育の実態、そしてアメリカの幼稚園カリキュラムの日本への影響などなど、先行研究の到達点を正確にふまえた分析の枠組みと、丁寧な実証によって新しい知見を数多くもたらした。

今後の検討課題としていくつか考えたことに触れておきたい。

一つは児童研究の影響をどう評価するかという問題である。児童研究の影響は、科学化への期待とともに子どもを客体化して「客観的な」研究とみなす方法だったのではないか。松本幼稚園における明治末期の個性研究では子どもの個性記述が家庭環境の問題点探しの様相を見せている。著者は要素主義であることを問題視しているが、要素主義は同時に観照的な子ども観を伴う。教育・支援という営みは、子ども自身の主体的な活動や思索を引き出すところにその技術の本質がある。子どもを客観的に知ることから、主体的に育てるための子ども研究への「科学」の発展はどのようにして実現したのか。保育実践史の中に、その展開は跡づけられないだろうか。

例えば、子どもとの実践から改革を導きだしたという保育者たちの研究の特徴はどのような性格をもつのだろうか。筆者には善タケが「子どもにまな」びながら自然物おもちゃを開発したこと、その際バックボーンとなったのが、児童研究、児童心理学の勉強であったという指摘が興味深かった。明治後期の松本幼稚園の児童心理学の学び方と、明治末の大阪、兵庫の保育者たちの児童心理学の学び方の間には子どもを客体化させる観照的な心理学のまなざしと、子どもの能動的な活動に即して保育教材を検討するという子ども観の大きな違いがある。保育者の主体的な学び取りの成果なのか、児童心理学の進展そのものに内在する子ども観、発達観の違いだったのだろうか。樋口長市を検討すると、あるいはその手がかりが得られるだろうか。

「本当に是等の観察したものを善導し生かして行く方法は私達の修養に他ならない」という保育者のことばを、著者は「科学的・客観的調査のみによって保育方法を標準化することの難しさ」を示唆していると評価する（190頁）。保育実践にカンやコツといった属身的な技術が大きな役割を果たすことは否定できないとしても、「教育科学」の誕生へ向けたあゆみとの距離は意識して計ってみたいと考えながら読んだ。

いま一点は、保育の地域性が捨象されていることに関わる。東京の官立と私立、大阪、松本、兵庫など、対象とする幼稚園は全国に跨がっている。地域や対象を限定して、ミクロに研究を積み重ねる歴史研究の手法からみると、非常に広い対象を扱っているわりには概して保育内容に地域性が浮かび上がってこなかった。例えば愛珠幼稚園は大阪商人の本拠地に作られていて豊かな街の地域環境が際立っている、松本幼稚園は子守り学校の実践を深めた信濃教育会とは接点がなかったのだろうか、兵庫でモンテッソーリの導入を図ったのは、及川平治や野口援太郎との接点はなかったのだろうかなどなど、幼児教育が地域の人々の暮らしや教育界の研究動向とどう関わったかが伝わらなかったのである。アメリカの思想の導入と、子どもの観察・実践の反省的吟味という二つのルーツのみでなく、地域の研究環境や教育環境との相互作用の意義が知りたいと考えた。保育者の主体性は、行政や支配的な理論に対して発揮されるだけでなく、保育の目的や性格をめぐる地域の人々の価値の争奪のなかで磨かれるもので、「幼児の生活」の内実もそれを離れては見えないものではないかと考えている。

（学術出版会、2012年５月、218頁、4,800円）